

村野次郎創刊

# 香蘭



2023年(令和5年)2月号

第100卷

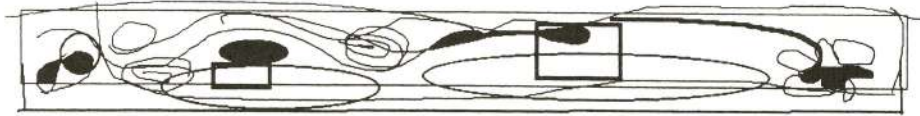
第2号

通卷1106号

二〇二三年(令和五年)二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇〇卷第一号



# 香 蘭

2023年(令和5年)2月号  
第100巻 第2号 通巻1106号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(90)	沙阿羅	表二
近詠十五首 ぬげがら	岡元子	2
作品		4
一		22
二		29
三		36
推薦香蘭集		37
香蘭集		16
作品一特選(十二月号)	伊藤(美)・伊藤(康)・大井田・近藤(光)	
作品二、三特選(十二月号)	小原・加瀬・沙阿羅・田中・中村(陽)・柳沼 鈴木(桂)・萩尾・本田・満木 安田・篠永・河野・馬場・藤田・三神	
一頁公論(21) もう一度訪ねたい場所 宮城県富谷市	中村美幸	15
村野次郎への旅(154)	千々和久幸	20
エッセイ・自由研究『子育てをうたう』松村由利子著を読んで	丑山眞弓	40
焦点(十二月号) ユーモア、アイロニー、ウィットの歌	渡辺礼比子	42
七首抄(十二月号)	山中・生田・内海・西崎	44
長野道子「金太郎飴」評(十二月号近詠十五首)	関口静子	45
作品一	中村かよ子	46
作品二	石井雅子	48
作品三	伊藤美恵子	50
香蘭集	柏原義清	52
緑地帯	青山・河野・五嶋・小城	54
明宝研究会第一三四回十一月例会 完了の助動詞について	田中あさひ	58
耳言あれこれ(15)	田中あさひ	62
他誌拝見125	小原裕光	63
飯島智恵子歌集『草木瓜の咲く家』を読む会	丸山三枝子	64
歌会及び会合・会員消息・他		68
編集後記・新宿日記		72
表紙絵	中村 陽子「春ひかる」	和雄
	目次・緑地帯カット	和雄

## 呼びまどひよろこびましき母の子は

### 一郎次郎三郎四郎五郎六郎はかけて七郎

『夕あかり』

この歌を初めて読んだ時、とあるSF小説の主人公の名前を思い出してしまった。傭兵として宇宙を駆け巡る、三四郎という青年である。彼の数多い兄弟は生まれた順に数字の名前がつけられていて、双子で生まれた片割れが養子に出されてしまったために、数合わせで三四郎という名前になったという。

しかし、この歌の「かけて」は他界されてしまったと察せられる。兄弟の名を並べてサラリと詠んでいるように見えるが、「かけて」の一言でとても深い歌になつていて心に残った。「母の子」の一人として兄弟を詠んでいて、兄弟と自分を産み育ててくれた母への思慕と感謝が感じられる。

一人っ子で一人っ子の母である私は、きょうだいの感覚が分からない。きょうだいの多い両親を羨んでいたが、死別の悲しい思いを何度もするのが辛いと両親は言っていた。

〔『夕あかり』238首、『村野次郎三三首』19頁に掲載〕

## 四 選 者 の 作 品

哀 歌 一 平塚 千々と久 幸

妻逝きぬ令和四年十一月二十四日未明難病の果て

病床でいつ笑いしか妻の顔を思い出せざるまま逝かしめき

コロナ禍に面会叶わぬ歳月を悔やしみにつつ額めかに手を触る

喜びより悲しみ多き人生とは思ふまじ明日も生きねばならず

傍らに在りし日は意識せざりしが死なれてみればこれぞわが妻

恐らくは雑事に紛れただ日々を流され行かんよ妻亡きのちも

思わざる妻の暮らしの一面を死したる後に子に教えらる

いつしかに足は海縁うみぎへ向かい行く釣り人だけが来ている海へ

どこにも居ない 鎌倉 高 島 憲 子

いつも居る場所に母居る安らぎに今日も夫は面会にゆく

夫の母は車椅子より如何に見む連れ立ちて来る息子夫婦を

いつか来るその日が突然やつて来た「あんた誰や」と母に問はるる

母さんの記憶の中の「のんちゃん」はおそらく今のわたしではない

マスク取りしばし語れば「のんちゃんか」とやうやく母の目が笑ひたり

母さんに「誰や」と一時いっぺん忘れられ何処にもわたし居ないみたいだ

「このリンドウ、ええ色やねえ」と声を上ぐ差入れの花の名は忘れざる  
雲ひとつ無きこの空を怖れたりあをあとせる底無しのの空

手術説明 我孫子 丸 山 三枝子

パソコンの立ち上がる間に着替えてメールチェックをして外出す

小雨降る表参道の街路ゆく手術前検査終えたる娘と

久々の娘とのランチは表参道伊藤病院わきのごはん屋

病名は甲状腺腫良性と告げられ始まる手術の説明

二つある甲状腺の左全摘と殊もなく言う医師の声聞く

一時間の手術は全身麻酔なり眠つてる間に済むと娘の言う

手術説明すなわちリスクの数々の説明にして不安募らす

コロナには罹らぬようにと念押しされ手術説明室を出できぬ

落ちてゆくとき 東京 桜 井 京 子

晩秋にとどいた別れの手紙なりき焼却炉にて焔あげぬ

わたしから去りゆく人よほんたうはわたしがつつと去り続けぬき

思ひきり蹴りたいところところに石はなく都会の風がころがつてゆく

愛された記憶のやうなり風のなか時ながく咲くキバナコスモス

わたしから先に行くねと言ひたるか百合樹ゆりの木の葉の落ちてゆくとき

暮れ早き路地を歩めばいづこにもカネタタキあて先を越さるる

セロトニンセロトニンが足りないさうな朝の陽を浴びて歩いて行くあてがない

ころがつてゐるのがよくて卓上のドラゴンフルーツ追熟はせず

# 作品一特選



(十二月号作品から)

千々和 久幸 選

## 遺影の夫

川崎 伊藤美恵子

九年間夫を目守りて添いきしが逝くはあつけなし転倒などして日に幾たび遺影の夫を見ておればあんまり見るなと言ったような遺影の前に甥と語らう秋の夜<sup>よ</sup>からだの奥から血があたたまる窓際に遺影を置きてともに見るすこし欠けたる立秋の月  
夫の好きなラタトーユ煮て安酒のアルパカ飲んでるわがどん底で夫の死後のびたる爪を音たてて光まぶしき厨に切るも  
夫の骨われから離れてかろうとへああ死んだんだとはじめて思う  
・悲しみの極限まで行けば、いずれ浮上する日が来よう。

## じわじわと

東京 伊藤康子

じわじわと通勤電車の混み始め押し込まれゆく流れのままにガラガラ電車で通勤してたつて緊急事態宣言はるか  
口を覆い俯きながらやり過ごす奇妙な日々がありましたとさ

見開きの旅広告が増えてきた 友の旅歌を楽しむに待つ  
行事なくスカスカの学校生活ぞ修学旅行に行ける日はいつ  
植え込みに群れ咲く紅曼珠沙華白も見えたる葬儀屋の前  
来月は残業の日が多いかもいつものようにシフト配らる  
・通勤電車の中が社会との接点であり、作歌の工房でもある。

## 坂の上の家

川崎 大井田 啓子

コロナ菌はまだ居すわるぞ曇天をカラスの声が近々聞こゆ  
傘さして左手<sup>ひだり</sup>に杖を突く夫サルスベリの紅見上げたりして  
おほよそは流れのままに生ききしがどの流れに乗るかが問題だ  
白壁にツクツクボウシが鳴きをれど応ふる声はどこにもあらず  
わが家が坂の上にあることをとりとめもなく思ひて下る  
水たまりに次々落つる雨の粒一瞬光る輪となりて消ゆ  
口癖に父の命日告げをりし母の忌日がはや五回過ぐ  
・平穏な日常を慈しみつつ自在に歌う贅沢を思うべし。

## 糸 蜻 蛉

足利 近藤 光子

黄緑の大きなゴージャ頂きぬ町内費集めに廻りてゆけば  
明日こそは私の好きな鱈フライ休肝日明けをひとり楽しむ  
三回目すべてファイザー使用とう証明書もち温泉に行く  
副反応怖れてワクチン接種せぬ嫁女の気持ちわからぬでなし  
甥姪と息子も揃うおくり盆明日入院の甥も笑みつつ

待つていた九月の声聞きチンゲン菜、かき菜を蒔きぬ風に吹かれて  
茄子畑みかんの木下何時も来る糸蜻蛉なり亡夫にあらん

・飄々と詠んでおかしみを誘う、糸蜻蛉も目を細めて見守っている。

九 月 西宮 鈴 木 桂 子

（のこぎりで切るから、けふは。足出して）ギブスはづすと言つてよ、先生  
負けるなよ、負けてならずもしかいへど総じてみれば負けの半生  
負けたから意味なきなどと思はざる、百日紅あかくわが眼を灼くに  
何があるといふではないが窓あけてしばらく眺む見なれし街を  
コーヒーは冷めてしまつた一日をさうして一日だけ生きてみる  
青みかんしぼりて甘き湯にたらすガラスのやうな秋が来てゐる  
道玄坂下交叉点あかあかと埋めつくさむ曼珠沙華の花

・負けの半生と思うなら、逆転する時間はまだ十分にある。

初 尾 花 福岡 萩 尾 礼 子

待ち望むものなきわれに見よとてか障子を照らす十六夜の月  
月明りに窓は牙ゆれどわが心いたく曇りて窓をひらけず  
くれないの花さかせしまま根刮ぎに倒れたる萩の無念思うも  
巢箱へと飛び交う蜜蜂眺めいる満足げなる娘の顔は  
暇あれば飛び交う蜂の横に立ち蜂の行動楽しみおりぬ  
馬をみにはるばる岩手に行きし娘が栗を拾いて帰りに来たりぬ  
朝の日に露もちひかる初尾花山路は既に秋の色濃き

・今は美しい歌よりも地味な歌のリアリティに軸足を置きたい。

愛国パン 長崎 本 田 民 子

館パンはボンパドールの愛国パン館たつぷりですしりと重い  
愛国とう町があるらし北海道に美味しい小豆の産地だとい  
造船所の屋根より上の花火のみわが家から見えてこの夏もゆ  
さいたまの名月ですと息子のラインに長崎の名月をラインで送  
り余曲折ありしがついにわが街に新幹線が開通したり  
待ち待ちし新幹線がわが街に開通したり乗らねばならぬ

千年も生きたるように甲羅には苔などつけて亀があらわる  
・平凡な日常から詩を掬い採り達者な歌に仕上げた。

卵 酒 川 越 満 木 好 美

道の辺に屁糞葛と呼ばれて何か言いたげに小花を咲かす  
ヤイトバナ、サオトメカズラの名も持ちて屁糞葛は愛らしく咲く  
歯を削る音を聞きつつ順を待たつた五分をジリジリと待つ  
昭和には「待つわ」とう歌はやりたり今の世代は待たたりしない  
はにかめる遺影の父が守りいる誰も住まないふるさとの家  
風邪ひきて考が何だか嬉しげに飲んでいたのは卵酒なりき  
虫すだく他には何も聞こえ来ぬひとり眠るふるさとの家

・歌集刊行以後、作歌力の進境著しい。四、六首に注目。

# 作品二、三特選



(十二月号作品から)

桜井京子 選

## 〈作品二〉

疑うことなく 鎌倉 小原裕光

揚げたてのドーナツかと思いたり遙か銀河のブラックホール  
路線バスのテールランプが登りゆく乗ればよかつた いいや歩こう  
断捨離に倦みて出で来し店先にこれぞと買いたり『捨てない生き方』  
朝露に一芯二葉と摘みし茶か香り豊かに初夏を伝える

・二首目、バスを見送りながら怠け心を振り切ったところがよい。

秋 麗 東京 加瀬 喜美江

教え子の丹精の梨届きたり青梨秋麗ひとつが混じる  
両親も祖父母も健在朝食を囲みしあの日の母の味噌汁  
夫がなりクラゲもトカゲも痛くなるヒトなる類の病にあらぬ  
両生類イモリは癌にならないと今言われてもどうにもならぬ  
・三首目、四首目、夫の癌と向き合い愚痴を詩の世界に打ち上げた。

蟬の声 相模原 沙 阿 羅

わが庭の沙羅の木ひっそり枯れおりぬ あの日のわれの身代わりなるや  
「異常なし、大きな病気ではありません。」小さな病気と一生一緒  
賭けに負け一生借金を負う気分 検査結果は治療法なし  
低音でツクツク法師鳴きおれば経に聞こえる彼岸中日  
・治療法のない病気を詩に昇華させ、生涯耐える覚悟を決めている。

木瓜酒になる 取手 田中 あさひ

遠慮がちに来るものもある八月二十八日の北窓の秋  
農夫の妻となるに焦がれて四十年サラリーマンの妻も了へたり  
馬鈴薯の茎にトマトが生ることもおしへくれたり馬鈴薯の茎  
あをあをと木瓜の実だまつてふくらんで木瓜酒になるとはつゆ知らざらむ  
四本の脚を持つともひとたびも走ることもなく老ゆるわが椅子  
・四首目、思わぬ運命を辿る木瓜の実をウイットにくるんで楽しい歌。

無用な物 東京 中村 陽子

部屋中の無用な物が気になりて片付けだせば果てしもあらず  
食器棚の一番上はうす暗く化石のような皿が並びぬ  
とり出して眺めて娘は思い出のかき氷器を迷わず捨てる  
食器棚の上段ばつさり空にして娘がほうと眺めていたり  
虫の音に追われて夏は過ぎ去りぬぼんやり座るわれを残して  
・五首目、忙しなく過ぎた夏に置き去りにされた切なさど脱力感。

ガセネタ 足利 柳 沼 きよ子

国葬より統一教会葬が似合うと思う安倍氏であった

早まって国葬口にし燥ぎ過ぎ引つ込みつかぬはプーチンに似る  
政界に深く巢食ったカルト教暴けば無駄にならぬ安倍の死  
プーチンの重病説はガセネタと当てが外れた希望的観測

・彼我の政治状況を縦横無尽に切つて捨てた心地よさ。

爪の五色 行田 安田 恵子

奔放に生きてみたしと晩歳のわれのセリフは風に消さるる

タンポポの冠毛が風にはこぼれて赤信号の歩道をわたる  
やわらかき舌に言葉をあそばせて時には毒なきうそもすべらす  
嗷嗷と夫の鬱積我に向かう身をかわしつづわれのこの夏

・日常の裏側にある危うさを引き受けて、賢明な生き方を窺わせる。

### 〈作品三〉

遺伝子 川崎 篠 永路 子

漂泊の遺伝子あらば引きこもりの遺伝子もあらん 布団の温し  
メーカーが修理しませんと明記する新しきスマホは売れ行き好調  
神さまがもうおしまいと練引きをするまでとりあえずまた来る明日  
人指し指の爪は内向きにねじれゆきいつか中指と向き合うつもり  
・自身が抱える負の側面と葛藤し、折り合おうとしている。

晩夏の空 鎌倉 河野 慎二

炎昼の汗にまみれてこの宵の飲み代欲しさに草刈るわれは  
枝払ふときに仰ぎぬやや高くなりたるやうな晩夏の空を  
傾いてバイクは去りたり行く夏の夕べ明るき岬のかけへ

・滑らかな自然体が心地よく、穏やかな詩的世界に向かう作者か。

さようなら 松江 馬場 美信

秋風の音にさらわれ逝きたまう声は聞けねど君はここにいろ  
パワフルに歌詠み続け逝きましし石倉さんの笑みな忘れそ  
言葉にはならないけれどさようならあなたと話す最後のことは

・石倉正枝さんへの追悼歌。敬愛と感謝の念が伝わってくる。

肩の荷を 横浜 藤田 祐恵

昨夜から予報は雨のはずだったあたふたテニスの支度する夫  
今月もポストに誘いが届きたり何とか祭りのシヨップの葉書  
肩の荷をどんと下ろせば風が吹くバッグというは軽いのが良し

・三首目、重圧から解放された気分共感し、納得させられる歌。

麦の行方 愛知 三神 進

誰が刈り誰が運んで何処へ行く砲火のうしろに実る麦の穂  
公園に響く空襲警報に母子が残すブランコの揺れ  
ガガーリンよ地球は今でも青ですかあなたの国が血で染めている

・三首目、侵攻の手を緩めないロシアへの批判が胸に響く歌である。



# ぬけがら

## 岡 元子

猛暑日と体調不良をいひわけに放置する庭メヒシバ群れる

秋茄子を期待し枝を整へむ見やう見まねの素人仕事

この夏の暑さに耐へし貴船菊秋の気配に花咲きいだす

西王母椿のつぼみふくらめり葉かげに見える淡き紅

山門にいかめしく立つ禁碑あり葷酒くんしゅ入るならみをかきかす

王羲之と顔真卿が空海の葉籠中でくつろぎてゐる

食シ 見むと見上げるけれど空狭し隣家の屋根が月をかくせる

惑星は計算どほりに食みせるわが人生は軌道をそれる

陽性ヤウセイといふこゑ聞きてたうとつにティンカー・ベルを思ひ出しぬ

温暖化 コロナ禍 戦火 地球上あるところなしどこへ行かむか

鶏のゼロインフルを期すために一羽残らず殺処分する

ひと言随想

禁碑

赤色の鬼にふんする若者が村の祭りを盛り上げたりし

ハロウインはケルトのはうからやつてきてZ世代はハロウインが好き  
小春日におろさむとするすだれには蟬のぬけがらすがりつきある

紅葉し落葉を散らし足早に秋は過ぎゆき冬の訪れ

「不許葦酒入山門」

（葦酒山門に入るを許さず）

せられた。

「酒」については、説明を要しないであろう。

寺院の山門前の石碑に彫られている言葉で、  
出家者の修業のさまたげになるものを、寺域  
内に持ちこむことを禁じているのである。

「葦」とは、臭気のある野菜で、ねぎ、ニ  
ラ、らつきょう、ニンニク、ハジカミの類を

指す。また日本では、鳥獣魚肉の意味にも解

むかし、粋な人がいて

「許さざれど葦酒山門に入る」

と読んで、ひょうたんぶらぶら入っていった  
そうなの。

村野次郎への旅（154）

## 大正期の「香蘭」（十五）

前回到引き続き「香蘭」大正十五年（1926）七月號を読んでいる。毎号本誌の目玉とも言うべき前月歌壇合評から始めよう。評者は杉浦翠子、矢代東代、酒井廣治である。

（一）朝々に庭掃きくるるこの人のをんななる身をあはれと思ふ

（二）朝のいきれこもれる部屋の倦みご、ろ菰のわか芽に薄日さしつ、土岐 善磨

（翠子）（一）は土岐さんの淡い女性観ですね。

（二）のお歌の「倦みご、ろ」は如何です。「倦みつつある心」と云ふところをかう云はれたのでせうが、私はかう云ふ言葉はどうも、投書歌あたりに大分見うけるし安價に感じて、好かないのです。「心」とこの際はなくとも「倦みつつ」と云へば解りはしないでせうか。よし「心」と云ふ字を用ふるにしても、「心倦み」と云うやうな遣ひ方を私だつたら致しませんが、兎に角、批評と云ふものは自分の意見

## 千々和久 幸

で云ふより仕方がないのですから、御免下さい。

（廣治）第一首は少し流れすぎていささか感じの乗らないきらひがあるけれど素直に受け入れられる歌だ。「をんななる身」と云つたところに少し難があると思ふ。寝起きの重苦しい部屋のいきれを朝のいきれと云つては鳥渡無理でないか。これでは寧ろすがすがしい感がある。上句どうもすつさりとしなない。下句は清新でよい。全體に感じが非常に繊細である。（東村）土岐さんの作としては、大分變つてゐる。思ふに作者今轉機に立てるならんか。期待す。

（次郎）（一）は三句四句の續き工合に聊か考へさせられる所があるが、氏の歌らしい。（二）は氏よりも他の人でも作れる歌の如く思ふ。

○ （一）咲きみてる枝垂ざくらつららの木ぬれには晝疾ひるはげ

き雲のかげおとしつ、

（二）晝疾ひるはげき雲のかげかも咲きみてる梢はくらく揺れさだまらず 並木 秋人

（翠子）かういふのを所謂、寫生の歌と云ふのならば、私はあまり情緒のすくないのを憾みます。作者の心の動きを壓して對象物の描寫を主にする方をよしとする方があるとするならこれらのお歌はそれに叶つたものでせう。

（一）、（二）と比較するならば、（一）の方を私は採ります。但し、「かげおとしつつ」に「おとしつ、」は要らないように思ひます。

（二）の歌の方の四五句は洗練されてゐない若々しさを憾みます。二首とも、調子ががたがたとしてゐるやうに思はれるのは、部分々々を寫生し過ぎて居る所以だらうと思ひますが、いかゞ。

（廣治）三句の「には」が少し固くひいて面白くない。結句「つ、」もこゝでは意味をなさない。第二首の下句は時間的でなくもつと單的に瞬間をねらつたら良い歌にならうと思ふ。あまり清新ではないが見どころはたしかに良い。

（東村）並木君は、何か特種な表現をねらひ、時々うまくやる事もある。この二首は失敗の

方ならん。

(次郎) (一)はもう少し深さがあつていい。(二)は言葉だけで感じがまだ出てゐないやうである。

以上この欄は、毎号手厳しい批評が展開されて、スリリングな面白さがある。偶然だろうが結句の「つつ」は白秋の影響というなら解るが、あるいはこの時期の流行りであつたのかも知れない。

次いで香蘭合評会を覗いて見よう。歌誌に載つたのは初見である。評者は村野次郎、杉浦翠子、今井嘉雄、中河與一、本間樂寛。

(六月廿日、香蘭例會の當日、社友諸君は來會を待ちつゝ、六月號所載の左の數氏の歌を合評するを得た)

○ ひたなきにさえづる鳥よかはたれの楠の若葉はかけりそめつ、 鹽塚芳太郎

(嘉男) 黄昏は誰そ彼で夕方、かはたれは曉方、がほんとうですが、此の頃は両方とも夕方の意味に使はれてゐるやうです。

(翠子) これほどは矢張りたそがれと書いたらよさそうですにね、知らないでゐて混同してしてゐるのは大きな過ちです。それに二句の

鳥よのよがどうでせうか、佳い歌なんですけど、よが少しも利いていませんねー。

(樂寛) 大體に於て春山の黄昏の情景がよく出てゐる。

(次郎) この作者は毎號かなりの力作を寄せ。今度のも大體に於て何れも佳作だと思ふ。

○ やみこやるふとんにたまる白ほこり拂へと  
母はいひがてぬかも 宮地 辰夫

(翠子) 白ほこりが無理ですねー、どういふわけで白埃とことなるのでせうか。

(樂寛) たまるも大袈裟だと思ふが。  
(嘉雄) 植松壽樹さんに「かりそめの病とおもへと臥やれば枕べしるく埃たまるも」といふのがありますが、庭燎の中で私の最も好きな歌の一つです。それとこれとは同じ様な境地であり乍ら、かなりの懸隔があり、比較すと

良否の區別が一層鮮やかだと思ひます。

(翠子) 矢張り見方が複雑なんですな。  
(次郎) 下句もしつくりしてゐません。

○ 夜に入りて風の烈しき納屋ならしものの倒る、大きな音 田代 絹子

(嘉雄) 調子が張つてゐて、非常に感じのよい歌である。

(樂寛) 同感ですが、納屋ばかりへ風が烈しく吹いてゐるようにとれる。

(翠子) 誇張して歌ふ場合もあるのですからさまで差支ないと思はれます。  
(次郎) 中村憲吉氏に「棟にあつる夜風の音大きなり木納屋にかあらん物の落つる音」といふのがありますが、この歌とどうでせう。

(樂寛) 感じからいふと、寧ろ田代さんの方が出てゐるやうだ。下句がいゝんだな。

(翠子) 中村さんの歌は、餘り苦心されてまともり過ぎてゐるせいか、技巧に勝つて味ひが乏しいといふ感じがしますねー。

此の歌など、よし幾分の缺點があるとしてもその直載な所がかへつて萬葉への心に通ふといふものです。

○ 香蘭合評会は、残念ながらここで紙幅が尽きた。折を見て書き継いでいきたい。それにしても出詠者で今日名前の残つてゐる会員は見当たらない。これもまた「香蘭」の貴重な歴史である。